

平成17年  
6月号

250円

# やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



国家

結びつき、そして他者との関係

言葉がもたらす災いと純潔さ

科学:大きな共同体

『フォーエバー・フィーバー』

真理を求める人の第五の階梯「敬虔さ(ワラウ)」

王様から預かった農場

パラダイスにおけるみ使いの同僚達

「……私たちが人々の欠点よりも、いい点を見出してそれを評価できればどれほどいいでしょう。他人の過ちに対して見ない、聞かない、話さないという態度をとり、人の欠点を見ず、聞かず、それらを話さずにいられたらどれほどいいでしょう……」



先ごろ、元日本兵がフィリピンで発見されたという一大ニュースが日本中を駆け巡りました。情報が曖昧で結局は白紙に戻りましたが、80代の高齢となっているであろうその方々がジャングルの中でどのような生活を送ってきたのか、困難を極める中よくぞ生き延びられた、などと想像力を巡らしたり感慨深く思わされた出来事でした。もし自分自身がそのような状況下に置かれたとしたらどうなるのでしょうか。励ましあう仲間がいないくは恐らくとても生きていけないだろうと思います。一人きりだったら、よほど強い精神的支えでもない限り、絶望か発狂してしまいそうです。

このような極限状態にならずとも、仲間や一緒に行動してくれる人は普通の生活で欠かせない大切な存在です。私たちは学校や職場、家庭、地域、共通の趣味などでさまざまな共同体を形成しています。しかし地域共同体は崩壊と再構築の必要性が叫ばれて久しく、その他の場面でも人間関係のギクシャクから日々多くの問題が生じています。また見ず知らずの人であっても、例えば同じ電車の乗客同士であったり、同じ国に住む住民であったり、ひいては同じ地球に住む人間同士と広く幾重にも重なった共同体の輪が存在するにも関わらず、気に入った輪の中だけでしか係わり合いをもととしない人の多いことが社会にさまざまな歪みをもたらす原因となっているのでしょう。しかも今ある人間関係でさえ、その重要さに見合った関わり方をしているかという点と甚だ疑問です。

今月のテーマは「共同体」です。私自身、人間関係には長らくコンプレックスを抱えてやってきました。みなさんと共に行動を見直す指針とし、生きていく力となるような共同体形成に関わっていったらと願っています。



編集部より	2
国家	3
フズン（悲しみ）	4
結びつき、そして他者との関係	6
樋口めぐみさんへのインタビュー②	7
こわれた壺	8
購読者からのメッセージ	10
カレッジの小石〜ちいさなわたしの、	
オクスフォード旅行記〜9	11
言葉がもたらす災いと純潔さ	14
近い将来についての言及	16
祈りのある毎日へ	16
科学：大きな共同体	17
復活（5月号からのつづき）	18
『フォーエバー・フィーバー』	20
真理を求める人の第五の階梯	
「敬虔さ（ワラウ）」	22
バウンドケーキ	25
王様から預かった農場	26
パラダイスにおけるみ使いの同僚達	28





国家の柱石たらんと決意を固くした人々は、時に自分自身の問題は忘れることがあっても、国家に関わる問題とあらばどんな些細なものも見逃すことを良しとしません。

最良の状態にある国家とは、社会共通の問題に結束して取り組む人々、そして大多数の意見を尊重する人々によって構成されています。そうした国家の人々が、宗教や言語、歴史認識に関して価値を分かち合えるような共通の教育を受けているであろうことは言うに及ばないでしょう。

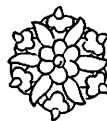
もし、自分の愛する人、もしくは自分を愛してくれている人々の批判に耳を傾けることができなかつたら、私たちは友人を無くし自らの欠点にも気付かないままであるかもしれません。

他の人が守れなかった約束にいつまでも拘泥してはなりません。むしろ自分自身が果たせなかった約束を忘れないようにしてください。あなたによくしてくれなかったといって他の人を責めてはなりません。そうではなく、あなたが他の人に善行をなすチャンスを逃したことを心に留めておくようにしなければなりません。

国家としての私たち一同を弱体化させる重大なものひとつに、私たちは友人に見せかけて裏で欺く人々に騙されやすいという点が挙げられます。どんな約束でも信じてよいわけではありません。笑顔を見せながらアドバイスしてくれる人なら誰でも従って惑わされてはなりません。

不正行為や策略をなすことが賢明、知的であると人々がみなすようになったとしたら、その国家が末期ガンのごとき状態に陥っていることの表れです。そのような国家では回復の兆しかに見える徴があったとしても幻想にすぎません。

ひとつの国家に所属する人々が家族のような強い関係を築き上げることができたら、その国家は急速に発展を遂げるでしょう。反対に、互いに愛し合わず信頼し合わない人々ばかりの国家は、その言葉が含む真の意味での国家とは言えず、なんの約束もない将来が待ち受けているだけです。





## フズン (悲しみ)

フズン (悲しみ) という言葉が、喜びや嬉しさの反対の言葉として、また義務を果たし理想を現実にする中で感じる苦痛を表現するために使われます。強い信仰を持つ者は皆、信仰の深さに応じてこの苦痛を感じ続け、時間という「織り機」の上でフズンという「糸」で人生という布を織っているのです。つまり、イスラームの精神が世界の至るところで息づき、ムスリムや他の抑圧された人々のため息が止まり、アッラーのもたらされた規則が人々の生活の中で実践されるようになるまで、人はフズンを感じ続けるのです。

このフズンは、死が訪れこの世での旅が無事終わり、最後の審判で引き止められることなく、あの世で永遠の幸福とアッラーの祝福が与えられる住まいに飛んでいけるまで続きます。信仰する者のフズンは次の意味が明らかになるまで止むことはないでしょう。『アッラーを讃えます。わたしたちから (凡ての) 苦勞を取り除いて下された御方。わたしたちの主は、度々赦される御方、(奉仕を) 十分に認められる御方です。(聖クルアーン 35 : 34)』

フズンは自分が人間であることの意味を認識することによって生まれ、その人の洞察力や認識力に応じて深くなります。これは信仰する人々が、絶えずアッラーに向かい、フズンを引き起こす現実を自覚して、助けが必要などときには常にアッラーに助けを求めるために必要な、重要な原動力なのです。

信仰する者は皆、アッラーのお喜びや永遠の幸福というとても貴重で価値のあるものを切望し、そのため限られた手段で「とても意味のあること」を人生という短い時間の中で達成しようとします。信仰する者が体験する病氣や苦痛は、他の様々な苦悩や不運と同じように、効果的な薬に似ています。その人の罪を拭い去り、「ひと滴の」善い行いを海に広げると同時に、一時的なものを永遠にするからです。信仰を持ち、絶え間ない悲しみに人生を送った人は、ある程度において、預言者たちのようであると言えるでしょう。預言者たちもそのような状態で人生を送ったからです。人類への恵み預言者ムハンマド (彼の上に平安と祝福あれ) はフズンの中に人生を送りましたが、著名なトルコ人の詩人・作家のネジブ・ファジルが彼のことをフズンの預言者と表現したのは、なんと意味深いことでしょうか。

フズンは信仰する者の心や感情を錆や腐敗から守り、内面世界とそこでの前進に集中させます。アッラーへの道の旅人は、忍耐と禁欲の四十日を何度も繰り返しても達することの出来ない純粋な精神生活のレベルに、フズンによって達することができるようになります。アッラーは外見や姿形ではなく、心に価値を見られます。中でも、悲しみ傷付いている心を大切に思われ、その心の持ち主にアッラーの存在を感じられるという栄誉を与えられます。それは次のように述べられています。『私は心が傷付いた人々の近くにいる。』<sup>1</sup>

スフィアン・イブン・ウヤイナは次のように述べています。『アッラーは悲しみ傷付いた一人のために、その民族全体に慈悲をかけられることがある。』<sup>2</sup>それはフズンが偽りのない心から出てくるものであり、人がアッラーに近付ける行為の中でも、誇示や賞賛されたいという欲望によって曇らされることが最も少ないものだからです。アッラーの恩恵と祝福の一部は、それ自身の持つ不純性を取り除くために、それを必要とする人々に割り当てられています。それはザカートと呼ばれていて、文字通りには「浄めること」

<sup>1</sup> Ajluni, Kash al-Khafa', 1.203.

<sup>2</sup> Kushayri, el-Risala al-Quashayriya, p.139.

や「増やすこと」という意味を持ちます。財産を得たり使ったりしている間にその財産についた汚れを浄め、アッラーの祝福としての価値を増やすからです。フズンは人の精神と意識を浄め、その清らかさを保つので、ザカートと同じような役割を果たしていると言えます。

アッラーは僕を愛されるときには、その僕の心をフズンで満たし、もしアッラーが僕に対し嫌われお怒りになられたら、その僕の心を娯楽と戯れへの欲求で満たされるということは、律法（トーラー）で述べられています。ビシュル・アル＝カフィは次のように述べています。『悲しみは支配者のようである。住んでいる場所には、他の人を住わせることはない。』<sup>3</sup> 支配者のいない国は混乱し無秩序になります。フズンを感じない心は荒廃している心なのです。

最も健全で豊かな心の持ち主預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）はいつも悲しそうで深く考え込んではいなかったでしょうか？ 預言者ヤーコブ（彼の上に平安あれ）は、フズンの翼で、彼と愛する息子預言者ユースフ（彼の上に平安あれ）の間にある「山を登り越えて行き」、喜ばしい夢が現実になるのを目撃しました。フズンに満ちた心のため息は、定期的に頻繁にアッラーを崇拝する人々がクルアーンを詠み、アッラーを心に思うことや、罪を避けている修行者の帰依や信仰と、同等の価値と意味があると考えられています。


誠実で信仰の固い人預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）は、現世の逆境に対する深いフズンによって、罪は許されるようになる、と述べられました。<sup>4</sup> この発言から、自分の罪から出たフズンやアッラーへの畏怖と愛から出たフズンが、いかに価値があり意味のあることなのか、またあの世にふさわしいものなのかが分かります。崇拝の義務を自分がすべきようにすることができないことに、フズンを感じる人々がいます。普通程度の信仰を持つ人々です。信仰の深い人々の中には、アッラー以外のものに惹かれることにフズンを感じる人もいます。また、常に自分自身がアッラーの前にいることを感じ、決してアッラーを忘れない一方で、人々を真実へと導くために人々の中にいるということにフズンを覚える人々もいます。彼らは常にアッラーとともにいることと、人々と一緒にいることのバランスを崩してしまうかもしれないと不安に震えます。それは人々を導くことに責任のある聖なる人々です。

最初の預言者アダム（彼の上に平安あれ）は人類と預言者たちの父でしたが、フズンの父でもありました。彼はこの世界での生活をフズンの中で始めました。楽園からの落下、楽園の喪失、アッラーからの別離、そしてその後の預言者としての重い責任…彼は生涯を通してフズンのため息をつき続けました。預言者ヌーフ（彼の上に平安あれ）は預言者になったときフズンで覆われていました。人々が完全に不信仰であることと、アッラーからの懲罰が彼らに今にも下されそうなことから来るフズンの波が、海の波として彼の胸の中にあられました。ある日、その波は高く膨れ上がり、フズンの中に山を飲み込み大地を沈めてしまいました。そして預言者ヌーフは洪水の預言者となりました。

預言者イブラヒーム（彼の上に平安あれ）の生涯はまるでフズンに応じて計画されたようでした。ニムロデとの苦闘、火の中に投げ込まれ、常に「火」に囲まれて生きたこと、不毛の谷に妻と息子を置き去りにしたこと、息子を犠牲にするように命令されたこと、その他現実の内的側面と出来事の意味にふさわしいたくさんの聖なるフズン…ムーサー、ダーウード、スレイマーン、ザカリーヤ、ヤヒヤー、そしてイーサーなど他の預言者全員（彼らの上に平安あれ）が人生を一連のフズンもしくはフズンの集まりとして経験し、フズンに包まれて生きました。最も偉大な預言者と彼の教友たちが最も深いフズンを味わったのです。

<sup>3</sup> Quashayri, ibid., p.138.

<sup>4</sup> Haythami, Majma' al-Zawa'id, 4.63



私の周りにはたくさんの違う国々からの友人がいます。トルコ、パキスタン、バングラデッシュ、インド、エジプト、ヨルダン、スーダン、セネガルなど、また私の友人の旦那様はモロッコ、アラブ首長国連邦、パキスタンなど様々な国々出身の人がいます。彼らにはムスリムであるという共通点がありますが、実にたくさんの文化圏からの友人がいます。日本で生活をしている一人の日本人であるのにムスリムというだけでこんなにたくさんの国々からの人々と知り合い、交流をもてるということはとても興味深いことです。

私は昔からの日本人の友人とも時々会って食事をしたりお茶をしたりしますが、彼らはみな私がムスリムであることを知っているのので、食事についても、よく考えてくれます。この点に関しては本当に本当にうれしく思います。ただ食事ということではなく、私のこの生活を否定しないという点でとてもうれしく思います。

これは友人だけに限らず、私の家族にも言えることで、私がムスリムになってから一度も否定的な反発を受けたことがないということです。食事にも気をつけてくれますし、お祈りをしてもそっとしておいてくれます。また断食の際に、母親が、私が断食をしているのを知って、それならと母も断食明けの時間まで待つとあって、一緒に断食明けにお菓子を食った事が印象に残っています。またスカーフを作ろうと手芸のお店に行くと、一緒に布を選んでくれたり、そんな事がとっても幸せに感じました。祖母の得意なポテトサラダには、いつしかハムが消えていました。もちろん私が食べられるようにとの配慮でした。食卓には野菜ものが増え、実家に帰ると、魚を焼いてあげようかという声もかかるようになりました。

父親は一切私にも、主人にもお酒を勧めることは無く、親戚の人が勧めても代わりに断ってくれている姿もありました。兄弟達も食事に配慮してくれます。食べるものを勧める時には中に何が入っているのかを確かめてくれます。決して否定的な立場をとることはありません。

私と家族との関係は決して悪いものではありませんでしたし、今でも悪くありません。家族が、または友人達がムスリムでないからといって態度を変える必要はなく、クルアーンやハディースにあるように、両親に孝行するように、そして年齢に達しても優しく接するように、また善行と公正をもって人々に接することが必要です。こういった行動は人間にもともとあった性質ですが、同時に、成長とともに、また人々と接する過程で次第に失われていく性質でもあります。その人間の性質は人と人との関係を良く保つ為にとっても大切なポイントになります。人間が一生のうちで知り合う人々は限られています。今までに知り合った人々とも、これから出会う人々にも善行と公正をもって接していきたいものです。



Q：本以外にも翻訳の仕事をしているそうですが？

A：文書の翻訳のほかに、テレビ・ビデオなどの映像翻訳もしています。だいたい、ニュース番組やドキュメンタリー・歴史番組です。

Q：本を訳す時と別の苦労はありますか？

A：テレビの仕事は、本番直前に呼び出されるので、準備ができず、考古学用語などを調べる時間がなくて、前後の文章から内容を判断したり、辞書を借りる事もありました。でも、よほどの事が無い限り辞書は開きません。毎回辞書を開くようでは、仕事は来ませんからね。1時間のビデオをやっと訳したと思ったら、オンエアでは、3分くらいに編集されていたときは、悲しかった・・・。

Q：それは残念ですね。ビデオの訳はかなり大変だったんですか？

A：1つの文章の時間を細かくカウントして、日本語字幕をおくタイミングをあわせたり、一文一文、何秒に始まるか延々とチェックすることはかなり手間がかかります。しかし、メリットもあるんですよ。日本のメディアでは流れないトルコの生の映像がみれるんですから。

Q：仕事をしていて、トルコが懐かしくなるということですか？

A：トルコ語の方言などを聞くととても懐かしく思います。

Q：トルコへ留学した時は、交換留学とかですか？

A：いいえ、トルコにはずっと行きたかったもので、最初は大学の春休みに、自費で1ヶ月ほど行きました。

Q：初めてのトルコの印象はどうでしたか？

A：トルコには、朝ついたのですが、直にブルーモスクへ行きました。モスクから流れるアザーンの響きがとても感動的でしたね。トルコでは、数人の友人の家に泊まり、アンカラ・イスタンブール・バルケシル・ブルサなどに行きました。トプカプを始め宮殿めぐりもしましたよ。政教分離とはいえ、人々の暮らしには、イスラームの教え、文化が根付いていると感じました。ラマダン中は、早朝、太鼓をたたきながら町を歩き、起こしてくれる人がいるのですが、イスラーム文化を感じました。町のあちこちにあるモスクから流れるアザーンがいくつも重なって幻想的で、1400年の歴史の流れを感じました。それで1ヶ月はあっという間に過ぎてしまいました。



### <sup>5</sup>友情

同じライン上で統一されること、その一致が人々の精神において本質的なものとなること、すなわち人々が相互に理解しあい、一体化し、それが彼らの本質的な性質において同じ深さをもつようになることは、アッラーが信者たちをよくされる際の大切なきっかけ、媒介となります。そして、この一体化し一致している精神は、アッラーがご助力くださるという点で、「ドゥアー大全」を日に1、2回読了することよりもなお、意義のあるドゥアー、祈願となると私は信じています。統一、一致のうちに一体化した人々の精神、心には、アッラーの庇護、援助の御手が伸ばされ、彼らを常に善へ、正しい方向へ向かせられるのです。

この点で、「精神的友情」というのはすばらしいものです。ただ、それだけでは不十分なのです。兄弟となること、一致することというテーマは、感情的なものであるという以上に、意志にかかわるものといえます。それが実現するためには、決意と、意志、そして努力が必要です。信者がお互いを愛することにおいて基盤となるものは、感情的なものという以上に、信仰の一致が集団の一体化へと移行することに結びついている、論理的な友情、兄弟としての愛情なのです。

だからサイド・ヌルシ師は、「あなた方の創造主は同一、主は同一、崇拝する存在も同一、糧を与えられる存在も同一。千にもいたるものが同一である。あなた方の預言者は同一、宗教は同一、キブラは同一。百にもいたるものが同一である。」といわれたのです。

私たちの教えのあらゆる命令は、この方向性のうちにあり、精神の一体化をもたらすべく、方向付けられたものです。たとえば、礼拝は私たちを日に5回、同一というドームのもとに集わせます。先に来た者が前に並び、後から来た者が後ろに並びます。時には、私たちが望まない人と隣り合わせになり、礼拝をせざるを得ない状態が生じます。しかしそこではけんかや怒りのことを私たちは忘れず、列に並んでいる時には、かかとやひじがお互いに触れ、肩があたります。私たちは自分の腕を、隣のいる人のために少々狭めます。額を礼拝用の絨毯につける時には、私たちの腕は兄弟たちと抱き合うような形になります。ほかの兄弟たちのおいを感じ、彼らも私たちのおいを感じます。私たちは彼らの不快な部分を目にし、彼らも私たちの不快な部分を目にします。これらはみんな、隣にいる人との間に、一部であれ精神的な接触、一体化をもたらします。私たちが気がつかないような精神的な一体化、心の一体化です。しかし少なくとも、隣にいる人が、逃げ出さなければいけないような、遠ざかっていなければいけないような人では

<sup>5</sup>昔々ユーフラテス川のほとりに、民衆から慕われたスルタンがおりました。壊れたつぼで水を汲み、愛するスルタンに捧げた人がおりました。もともと水源そのものがスルタンの所有だったのですが、このこわれた壺では、なかなか水をすくい上げることができません。それでも、一生懸命水を汲もうとした貧しい人のお話が伝えられています。

「こわれた壺」はその話に因んでいます。M.F.ギュレン師が語っている言葉を文字にした文章の訳です。(HPからの転載)



ない、という感覚が、私たちの心に起こります。

サフルやイフタールによって、そしてさまざまなすばらしい出来事によって、あらゆる信者たちと喜びを分かち合うラマダーンの断食、貧者と富裕層の間の重要な架け橋であるザカート。私たちの町にあるモスクの拡大であるマッカの聖モスクで、さらに大きな集団となって集い、さまざまな色、民族の人々と、同じモスクのドームの下、同じテントの中にいること、カーバの周囲でともに周回し、ともに並んで走り、一緒にザムザムの井戸に降りていき、誰か知らない兄弟が使った鉢を使い、ほかの人が水を飲んだ同じ蛇口から水を飲む・・・一致、共同が生じる巡礼。これらすべてのイバーダが、私たちをともに生きるよう呼びかけ、そしてそれに慣れさせているのです。そう、イスラームの根本的な原則にある機知を把握するなら、あらゆる道が一致、一体化、統一といったものを示していることが理解されるのです。

### お互いによって試される

基盤にこの精神を持つイスラームを実践する際には、私たちもその一体化に到達できるような態度、振る舞いを、意志を伴って示すことが必要となります。忘れてはならないことは、ほかの媒介によって試されているのと同様に、私たちはお互いによっても試されているということです。つまり、アッラーは、出来事、悪事を行なう者からの災いなどによって試されるように、私たちの兄弟たちによっても試されるのです。聖クルアーンでも、「このようにわれは、彼らのある者で外(ほか)を試みる。」(家畜章第53節)と啓示されています。だから私たちは、ほかの信者たちとの間に生じる関係を、試練のひとつのあり方だとして把握し、あらゆる否定的な感情、思考、行動を、試みの要素としてとらえなければならないのです。

人が、試練の場にあることをきちんと最初から理解できていなければ、あらゆる立場の人が彼に厄介をかけ、手を伸ばしてつかんだすべての枝は折れ、地面は揺らぎ、みんなが彼に対して敵であると思いつまむようになります。これらがすべて、試みの要素に過ぎないことを認識できれば、このような思い込みはなくなります。衝撃を与える、醜悪な見かけの出来事が、ごく自然な、安らぎすら与える出来事と化すのです。少しばかり耐えることが必要なのです。

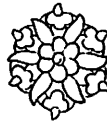
私たちは人間であり、だからいくつかの欠点があることはきわめて当たり前です。人々を個別に観察し、言い分を聞き、精神分析をすれば、彼らの友人たちに対しどれほど不満を抱かせているかを、容易に見ることができます。これは人間の本質として存在するものです。だから、心が広く、優しい顔を持つ人になるように努めなければならないのです。目の前に現れる山々や上り坂を乗り越えていくように、友人たちの過ちをも、しもべとしての道の途中の難所、として受け止め、それらを忍耐と寛容、優しさという翼を用いて乗り越えるべく、努力しなければならないのです。

人は永遠の幸福を求めるものであり、だからまず次のことを考えなければなりません。すなわち、私たちは容易に手に入るようなささやかなものを求めているのではなく、永遠の幸福を求めているのです。私たちの目標がこれほど価値のあるものである以上、その目標の価値に比例する形で、忍耐し、困難を乗り越えることが必要となります。この大きな目標を目指して歩く道の途中で、坂として私たちの前に現れる、気に入らない態度、言葉、行動などを、聖なるその目標のために受け入れ、試練の要素であることを

認識し、そしてよい性格でそれらを乗り越え、歩き続けなければならないのです。

だから、私たちが人々の欠点よりも、いい点を見出してそれを評価できればどれほどいいでしょう。他人の過ちに対して見ない、聞かない、話さないという態度をとり、人の欠点を見ず、聞かず、それらを話さずにいられたらどれほどいいでしょう。アッラーが私たちをお許しになられるように、また預言者がお許しにふさわしくあられ、一部のしもべたちをお許しにふさわしい状態になされたように、私たちが皆を許すことができればどれほどいいでしょう。

イスラームは、人々の欠点を追及せず、望まないものを見た時は目を閉じることをサダカと見なします。聖クルアーンでは「順境においてもまた逆境にあっても、(主の贈物を施しに) 使う者、怒りを押えて人々を寛容する者、本当にアッラーは善い行いをなす者を愛でられる。」(イムラーン家章第134節)とされています。



### 購読者からのメッセージ

リュックの先生へ、

5月号で先生の記事を読んで大変感動しました。必要とする他の子供へ移植されるために、小さな我が子の死に嘆き悲しむにもかかわらず、その体にメスを入られることに耐えられる両親にどんなに感謝しても足りないと思います。

時々病気になったり、または病気の方を目にしたりすることがない限り、健康な体を持っていることはどんなにすばらしいことか思いも着かないです。健康と体の全ての器官は、それらを必要とする人に売ろうとすれば、すごい高い値段で買いたい人がいつでもいるでしょう。しかし、健康と器官を持つために、特別に何もしなかったのです。我々に価値を把握できない健康と体を与えること好まれた創造主にどんなに感謝しても足りないでしょう。感謝しても、かれが与えた器官を使うので感謝できることとその信仰を与えたことにも別の感謝の気持をもたなければならないでしょうと思います。 R. I.



私は、観光地を駆け足で見て回るような旅行は好きではない。今までの旅でもほとんどが、友だちに会いに行くのが目的で、そしてその場所での友だちの暮らしを、ちょっとだけでも、いっしょに過ごすことで体験させてもらってきたつもりだ。そんな旅が好きなのだ。

とうとうオクスフォードに着いた私は、ほんの短期間だがそこでの「暮らし」を始めた。

### 何でも数字錠

案内してもらった友人宅のある学生寮は、内部は普通のマンションのようにとっても快適だった。勿論、友人ご夫婦にあたたかく迎えて頂いたことが一番大きかっただろう。

外のセキュリティはとてもしっかりしていた。さらに付属の自転車置き場にも洗濯室にも、至るところに数字錠があって、とても憶えきれないほどだった。銀色の、メタリックなボタンが縦に並んでいるタイプが多いのだが、すごく押し難くて、よくちゃんと押せたか不安になった。

### City Centre の朝市

翌日、前の日に「一本道で全然分かんないよ～」と思った道を、友人といっしょにバスで city centre まで下った。週に一度朝市があって、特に野菜が種類も豊富にしかも安く手に入るのが魅力的なのだ。早速、いろいろ見てまわり、ズッキーニやプラムを買った。他にお菓子などもたくさんあったし、衣類から日用品まで何でもそろった。

### 書店めぐり

その後、大きなところでは3つある書店をじっくり見て回った。一番歴史のある BLACKWELL 書店は、内装からして貫禄があった。手すりも床も階段も、ごつい感じの木製で、それが自然に光っているのだ。学生御用達ということもあって、専門書が非常に充実していた。ここでは心理学関係の本を読みあさった。

BORDERS では、明るい感じの児童書コーナーと、ポストカードのコーナーが気に入った。児童書のコーナーには子ども用の朗読や子守唄等の CD などもあった。日本では限られた場所で少しずつしか見ることのできないシリーズものもずらっと揃っていて、素敵なお宝めだった。友人は用事があったのでここで一旦別れた。

もう一つの書店の名前は忘れてしまったが、一番都会的な感じだったと記憶している。他にもオクスファムのお店などを見て回り、BORDERS でポストカードを買った後、暮れかける city centre からゆっくり歩いて帰った。途中、小さな商店街みたいなのがあった。Centre まで行かなくてもちょっとした買い物ならここのできるな、また後で来ようと思った。

夜には、翌日にお会いする予定の、私の指導教授が留学時代にお世話になったという方で、オクスフォード大学の心理学部の先生でいらっしゃる方にメールを書いたり、日本へあててポストカードを書いたりした。

### 自転車事情

翌日からの行動手段のメインは自転車だった。私は友人の前に使っていた自転車を貸してもらい、友人と

二人で出かけることが多かった。

最初に驚いたのは、自転車に「自転車立て」が付いていないことだ。つまり、自立しないのだ。自転車を置こうと思ったら、必ず立てかけなければならない。また、盗まれることが多いらしく、チェーンは必須だった。そして、いわゆる「ママチャリ」タイプの自転車が無い！私はほとんどオクスフォードしか滞在しなかったため他の地域のことは分からないが、全部いわゆるスポーツタイプなのである。

さらに、自転車は必ず車道を通らなければならない、必ず左側通行を守らなければならない。自動車がビュンビュン走っている道路を横切っても、左側通行を守らないといけないので、こわい時もあった。だが、たいていの自動車ドライバーは自転車に優しく、かなりの確率で譲ってくれたりするので、その点は日本より良かった。

### ランチをご一緒する

指導教授の留学時代のお知り合い、D博士とお会いする約束が確定し、彼女のいらっしゃる建物へと向かった。〇〇streetとか、△△roadとか、イギリスでは道が住所を構成している。友人といっしょに「ここらへんかな？」と言いながら探し、とうとう見つかった。遠いイギリスの地で「ここらへんかな？」という曖昧さがまた乙なものだった。

博士と会えた時点で友人とは一旦別れた。

私は緊張でガチガチになって、御土産の説明もしどろもどろになった。それでも何とか最初の挨拶は無事終わり、なんとランチをご一緒できることになった。彼女のいらっしゃった建物は、学部の建物で、簡単な食事を取れる休憩スペースがついていたのだ。職員や学生でなければそんな場所を使えないはずなので、記念になるし、大変光栄に思った。

スカーフを付けていたので一目瞭然かとは思ったが、食べられないもののことで失礼なことになってはいけないと思い、一応伏線として「ベジタリアンです。」と言っておいた。ポテトのサラダセットみたいなのがあったのでそれにしたかったのだが、売り切れだったのでツナサラダのみにした。博士は「ツナは良いの？」と心配して下さった。

休憩スペースには、自動の紅茶・コーヒーマシンがあった。たとえば紅茶だったら、最初にポン！と、紙コップにティーバッグが出てきて、ティーバッグをセットし、お湯を注いで熱々の紅茶ができるのだ。「これは便利ですねえ！」と盛り上がった。その熱々の紅茶をすすりながら、博士といっしょにランチを頂いた。私はずっと緊張しっぱなしで、英語もかなりおかしいことになっていたと思う。だが博士は、心理学の質問の時など、分からない単語は紙にいちいち書いて下さったり、大変親切にして下さった。本当に貴重な、良い経験をさせてもらったと感謝している。

### ボードリアン図書館

次なる予定は、ボードリアン図書館で、私の図書館IDを作ってもらったことだった。友人が勉強している間、私も勉強させてもらうようにだった。そのためにまず、友人と待ち合わせている場所まで行かなくては行けない。博士のいた建物を出発し、City Centre までまた自転車に乗って出発だった。

途中分かれ道で、どっちだろう？と思ったが、ええい、こっちだ〜！と左に曲がって走り出した。たった2日前に来たばかりのオクスフォードの街だが、前日に歩いて帰ったりしたこともあって、かなり馴染みができていた。よそ者という感じがあまりしない、あたたかい街だと思った。

友人と無事おちあうことができ、ボードリアン図書館に行く途中で、「あれっ？」と、いわゆるデジャヴュを感じた。後から判明したことだが、ボードリアン図書館の歴史の重みを感じる門が、「ハリー・ポッター」の映画で出てきたのだった。

その辺りで、友人に入学式の話をしてもらった。制服着用の義務があり、年齢が上の学校ほど、だんだん丈が長くなるのだが、なぜか袖が退化してしまって今ではヒラヒラのリボンみたいな飾りになってしまったようだ。だからどんなに長くても、ガウンというより「ベスト」なのだった。後で実物を見せてもらったが、「袖が退化」したという表現がびったりでおもしろかった。

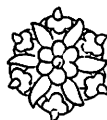
ボードリアン図書館では、オクスフォードにある全ての図書館で使える ID を一括で作ってくれる。少し料金がかかるが、使用期間によって違ってくる。私は大学の図書館と、指導教授より、推薦状を頂いてきていたのでそれを見せると、資格は十分ということでひとまず安心した。

だが、そこからが大変だった。まず、休みに入る前の中途半端な期間で、今は ID を作れないと言われた。それでもすぐに帰らなければならない旅行者ということをアピールして、何とか作ってもらえるはこびになった。次に、主に使用する図書館を言わなくてはいけなかった。私は友人がよく利用する「サックラー図書館」と言ったのだが、「なぜ？」と言われて言葉につまってしまった。友人の専門と私の専門は違うので、友人の専門の関係文献がたくさんあるサックラー図書館では不自然な感じだったらしい。

私は、「障害のことが出てくる神話があるときいたので、実際に見てみたいのです。」と言いたかったのだが、「神話」の英語が分からない。取調べのような雰囲気、完全にパニックになってしまい、あわやもう駄目かと思ったところへ、離れたところにいた友人が偶然私のところへ来てくれた。そこで、「すみません、こういうことを言いたいんですけど通訳してください」と頼んで、友人にスラスラとお話してもらったら、係りの人はすぐに OK を出してくれた。

利用の誓約みたいなものを（しかも各国語に翻訳されていた）読み上げ、写真を撮ってもらった後、料金を払って、とうとう ID カードをもらうことができた。「もっともっと英語を勉強しなきゃ駄目ですね、さっきは本当にありがとうございました。」と言うと、友人は、「あその係りの人たちって、とてもきれいな英語だったけど、話すのはなんで？と思うくらい速かったから大変だったよね。」と慰めてくれた。

・・・つづく





## 言葉がもたらす災いと純潔さ

預言者ムハンマドは次のように言われた。

「誰であれ、その両あごの間と、両足の間の事について私に約束し、保証する者に、私は天国のための保証人になろう」<sup>6</sup> 先月からのつづき。。

### アッラーの御前に近づくこと

ここで特に重要なある事項にあなた方の注意を引きたい。預言者は、その両あごの間や両足の間について約束する者に天国を約束されているのである。この世にいるうちから天国を約束された特別な人々についてはあなた方もご存知であろう。つまり、彼ら以外にも、高い段階に達したり、アッラーに近づいたりということによって、そのような名誉を得る者はいるということである。この名誉は、人が自分の言葉や性的行動を守ることの困難さからくるものである。欲望が全身を支配し、人格をも変えようとするその瞬間に、さらには彼の力が弱まってあらゆる悪に身をさらけ出しかけているようなその瞬間に、アッラーの承認を得るために彼が自分にブレーキをかけられるということは非常に重要なことである。そしてそれは彼をまっすぐ頂点まで引き上げる原動力になり得るのだ。このような行動を成し遂げる人は、預言者の保証のもと、天国へと飛翔することができるであろう。

繰り返し言いたい。自己の欲望にブレーキをかけられる者、悪に身をさらす瞬間に欲望をコントロールして罪を犯すことから逃れられる者、欲望に対して忍耐できる者、常にそのような弱さに対して忍耐している者は、他の者たちが何年もかかって獲得した恵みを、一瞬で獲得することができる。他の者が毎晩千ラカートの礼拝をして獲得するものよりさらに多くのものを、しかも一瞬のうちに獲得することができる。そしてまっすぐ、アッラーの友となる段階に近づいていくことができるのである。ただし私はこういう表現によって、決められた回数より多く礼拝する事、断食する事を軽んじているのではない。それらもアッラーに近づく上で重要な手段である。ただここでは、人を完成された状態に近づける更なる手段を述べたのみである。

アッラーから望もう、我々に力を与えられ、人としての高い段階に達することができるように。それを悪用することから逃れられるように。危険に身をさらした状態で境界を守れるということはとても重要なのである。苦しみが大きいほど戦利品は豊富で、困難さが大きいほど高い段階に達することができるのだ。あなた方が困難な状況で成功し、絶壁のぎりぎりのところで踏みとどまることができれば、その困難さに応じて報酬も多いのである。

もう少し解説してみよう。

<sup>6</sup> Bukhari, Riqaq 23

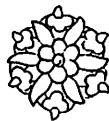
例えば、アッラーはあなた方に、いくつかの有害な要素を備えられた。怒り、悪意、憎悪、そして性欲といったものである。しかしこれらのどれ一つとして、あなた方を支配できたことはない。逆に、あなた方はその驚くべき意志で、それらをコントロールしてきたのだ。そして、意志と魂の人として生きてきたのである。ファルド（義務）やスンナ（随意）の行為を実行し、心や魂が高い段階を保つ事を追求してきたのだ。地獄へと続く道にある魅力的なものに惑わされず、天国へと続く道の困難さに耐えながら、アッラーに対する敬意を守ろうと努めてきたのである。そうしてあなた方は、預言者たち、教えに深い結びつきを持つ者たち、殉教者たちと同じ空気を分け合っていることに気がついたのだ。

世界が終末に近づいている時代、この膨大な反乱が起こる時代に、教えを守ろうと努めるこの甦った共同体を預言者ムハンマドが満足して眺めておられるということの背後にも、秘められた理由があるはずだと私は思う。繁華街や市場が、地獄の井戸のように人々を引き寄せては溶かしてしまうのに対し、自らの存在を守り、意志を通し、歯を食いしばって耐えるこの人々は、すぐに教友たちの仲間と見なされるであろう。教友は預言者ムハンマドの友であり、この人々は預言者の兄弟である。彼は何世紀も前に、訪れるであろうこの人々に対し、希望を明らかにされ、このように言われたのである。

「我々の兄弟に平安あれ」<sup>7</sup>

預言者ムハンマドは、この世紀の人々のために特に「誰であれ、その両あごの間と両足の間を守る事を約束するなら、私は彼に天国のための保証人になろう」と言われているかのようなのである。この言葉は次のような人々のために語られたものである。すなわち、天国を強く希望し、アッラーとその預言者にお目にかかる事に強い熱意を持つ者たちである。彼らは預言者の奇跡に満ちた言葉に従いながら行動し、胸をはって努力するのである。

このように預言者ムハンマドは、素晴らしい表現で天国へと続く道を示され、またこの短い表現の中で理想的な個人、共同体のあり方をも示されている。これほどの長い内容を、これほどまとまった形に凝縮できることは、預言者特有の知性の持ち主であること以外何を持って説明がつけられるだろうか。言葉の王は預言者ムハンマドであり、意味深い言葉、というのはこのお方の言葉にこそふさわしいのである。



---

<sup>7</sup> Hindi, Kanz al-'Ummal 12/183



近い将来についての言及

5. 100年生きる人について

預言者ムハンマドは、アブドラー・ビン・ブスルの頭にその手を置かれ「この子供はちょうど一世紀生きるだろう」と言われた。付け加えとして「この顔にあるイボもなくなるだろう」と言われた。後に教友の一人が言っている。「その人物はちょうど100年生きた。顔にあったイボもなくなった」<sup>8</sup>

聖クルアーンで「預言者よ、本当に来世(将来)は、あなたにとって現世(現在)より、もっとよいのである」(朝章93/4)とされているとおおり、いつでも、その前の瞬間よりも完全さに向かって段階を上げられ、そして常に以前の状態を不十分とみなされ、一日に100回はアッラーに赦しを乞われていた<sup>9</sup>。それと同じように、共同体(ウンマ)も、このお方を理解すること、知ることにおいて日々少しずつ進歩していた。そして預言者が将来について述べられたことが実現するのを見るにつけ、彼らの信仰心も増していった。そしてそのお方に「あなたは預言者です」と言ったのであった。

ドゥア(祈り)のある毎日へ



アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。  
心に信仰の光をともしられるお方よ、 創造物を守られるお方よ、  
無から創造するお方よ、 被造物に必要な事を暗示するお方よ、  
善悪、正邪を明示するお方よ、 物事を容易にするお方よ、  
すべてを美しく飾られるお方よ、 偉大なお方よ、  
援助なさるお方よ、 すべてを美しい色に染めなさるお方よ、

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄からお助け下さい。<sup>10</sup>

<sup>8</sup> Haithami, Majma' al-Zawa'id 9/404-405; Hakim, Mustedrek 4/500

<sup>9</sup> 参照 Muslim, Dhikr 42; Ibn Hanbal, Musnad 4/211

<sup>10</sup> 偉大な鎖帷子(ジャウシャヌルカビール)には、祈願(きがん)、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた審美を守るためには、偉大な鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大な鎖帷子(ジャウシャヌカビール)が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。





## 大きな共同体

今月のやすらぎのテーマは“共同体“ということなので、我々の中にある大きな共同体について考えてみましょう。

平均的な人間の身体は100兆もの細胞から出来ていると言われていています。元々は子宮内で卵子に精子が侵入して、受精卵ができます。この受精卵は一つの細胞です。我々の身体のどの部分もこの受精卵から分化して出来ています。つまり、元が一緒なので体細胞はどれも同じゲノム（遺伝情報）を持っています。しかし、細胞が存在する組織によって役割が異なります。髪の毛を作る細胞や光を認識する眼の細胞や古くなった骨を壊す破骨細胞。みな同じ遺伝情報を持っています。

顕微鏡を使わないと見る事が出来ないくらい小さな細胞が様々なことを常に把握しながら生きています。例えば、自分が何の細胞であって、細胞自身の年齢や身体全体の年齢を常時把握しています。そして細胞としての任務が終わったらアポトーシス（細胞死）を起こします。

我々の身体は細胞から出来ている大きな社会のようです。もちろんその社会にも人間社会のように競争もあります。例えば免疫系のT細胞やB細胞と言われる細胞群は自己細胞と非自己細胞を認識する細胞です。この細胞たちは大量に作られ、外来抗原への感受性によって一部だけ生き残り、ほとんどがアポトーシスのシグナルを受け死ぬはめに陥ります。あまり鈍い免疫細胞はもちろんのことあまり敏感な細胞だと自己細胞まで反応してしまうのもだめなのです。なのである程度、寛容を持つ細胞だけが生き残れます。

人間社会と同様におかしな細胞が出来たりもします。例えば、細胞は必要に応じて分裂を起こして増えることができます。しかし、癌細胞のような細胞は様々な原因によって必要以上に分裂を繰り返し、結局は腫瘍化します。初期に免疫細胞に異常が気付かれれば、破壊されます。しかし、癌細胞によって免疫細胞に異常が気付かれない細胞もいて、癌という病気を起こします。

環境汚染、病原菌、紫外線や遺伝的な原因などによって病気が起こることもありますが、ほとんどの場合細胞同士が兄弟であることを一刻も忘れずに平和に暮らしています。

今の人間社会は豊になりにつれ戦争やテロが絶えません。小さな細胞に学びたいものです。細胞を肉眼で見ることが出来なくても、今この文章をよんで理解できているのも何億もの細胞の協力の結果です。いつも考える人間でいられますように。クルアーンでは以下のように述べられています。

「われは地獄のために、ジンと人間の多くを創った。かれらは心を持つがそれで悟らず、目はあるがそれで見ず、また耳はあるがそれで聞かない。かれらは家畜のようである。いやそれよりも迷っている。かれらは（警告を）軽視する者である。」高壁（アル・アアラーフ）章179筋



## 復活 (5月号からのつづき)

### 10番めの論拠「一時的な創りがもたらす永遠な記憶」

来なさい、今日は春の祭りの日である。大きな変化が起こるのであろう。驚くべきことが起こるのであろう。この春の素晴らしい一日に、美しい花が咲いているこの緑の大平原へ行って、見てみよう。

ほら、見なさい！住民たちもこっちへ来る。見なさい、魔法のようなことが起こっている。あそこの建物群が突然荒廃し、全く別のものと化してしまった。ほら、奇跡が起こっている。荒廃した建物群が、こちら側に即座に創られた。平原が文明的な都市に変わったのだ。映画のスクリーンのように、毎時異なる世界を見せ、形を変えていつている。

注意しなさい。これほど複雑で速く、また膨大な数の、真実のスクリーンの中に、完全な秩序が存在するのだ。全てがふさわしい場所に配置される。想像上の映画のスクリーンでさえ、これほどの秩序を持つことはできないだろう。何百万人もの魔術師でさえ、このようなところを創るのは不可能だ。つまり、私たちに姿をお見せにならないこの支配者には、実に大きな奇跡があるのである。

愚かな者よ、君は「このような大きな国がどうやって崩壊して、別の地に創られようか」と言っていた。

しかし、君も見ての通りである。毎時、あなたが認めようとしなかった、国から国への大移動といったような多くの変革が、変化が起こっている。集まり、散らばり、こういった状態から理解できることがある。すなわち、目に見えるこの高速の集合、分解、形成、破壊といったもののうちには、また別の意図があるのだ。一時間の集合のために、十年分の費用がかけられている。つまり、こういった状態は、それ自体が目的というわけではなく、ある象徴化、またある模造である。あるお方がその奇跡で持って行なわれているのだ。形を写し取って形成できるように、どういうものになるか記憶され、記されるようにと。この方向を決めるための場で、全てが記録されているように、である。要するに、最も偉大なる集合場所において、作業はそれらの続きから行なわれる事になるのだ。その地で、常にその姿を見せることになるであろう。

これらの一時的な不確定状態が、しっかりとした状態を、永続的な果実を实らせるのである。

つまり、この大きな式典は、大きな幸福、偉大な審判といった、我々が知らない高尚な目的のためである。

### 11番めの論拠「全ての知恵、恵み、慈悲、正義の否定は出来ない」

来なさい、頑固な友よ。飛行機—東西に、すなわち過去と未来にいくことのできる乗り物に乗ってみよう。この、奇跡を起こされるお方が、他の名所でどのような奇跡を示しておられるのか、見に行こう。

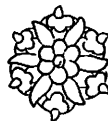
見なさい。我々が見てきた、駐屯地、広場、展示場といった驚くべきものは全ての場所に存在している。しかし、芸術として、形として、それらは全て異なったものである。次のことに注意してみなさい。すなわち、こういった不安定な駐屯地、一時的な広場、長くは持たない展示場といったものに、どれほど輝かしい英知による秩序、いかに明らかな恵みのしるし、どれほど崇高な正義のしるし、いかに広範な慈悲の果実をみることができることか。真実を理解する力のない者以外、皆このことを理解できるだろう。そのお方の英知よりもさらに崇高な英知、その恵みよりもさらに大きな恵み、その慈悲よりもさらに素晴らしき慈悲、その正義よりもさらに崇高な正義はあり得ず、想像もされ得ない。

仮に、君が妄想しているように、その国の恒常的な駐屯地、崇高な居住地、永遠の状態、不滅の住まい、定住している住民、幸運な民がいないと仮定してみよう。この英知、恵み、慈悲、正義といった真実に、このはかない国が到達していないことは明らかである。

これらにふさわしい、別の場所が存在しないとしてみよう。それは真昼間、太陽の光を見ながらお、太陽の存在を否定するような愚かさで、この目に見える英知を否定し、我々が見ているこの恵みを否定し、この慈悲をも否定し、はっきりとしたしるしで示されているこの正義をも否定することが必要となる。その上、我々が見てきたこの支配者の御業、気前のよさの業績、慈悲の恵みの持ち主であられるお方を（絶対により得ないことであるが）、ふざけるのが好きな遊び人、残酷な圧制者と見なすことも必要となる。

しかし、これは事実に対し矛盾することである。知恵のある大勢の人が一致することによって不可能とされていることである。ただ、あらゆる全てのものの存在を否定する学派の者たちを除いて。

つまり、この国とはまた別の国が存在する。そこでは大いなる裁き、正義の実現のための場、広大な宴会場が存在する。この慈悲、英知、恵み、正義といったものが完全に示されるためである。





## 『フォーエバー・フィーバー』 Forever Fiver

5月も終わり、夏も近づく6月となりましたが、皆さんは5月病に悩まされませんでしたか？5月病は、新しい環境などになじめなくて5月の連休明けなどに起こる抑鬱症であったり、焦りや気持ちが不安定な状態をさす言葉です。今まではずっと学生だったので、毎年だいたい変わらず同じ雰囲気でも過ごしてきたのですが、今年は新しい環境にはいったため、私にも多少5月病的なものが訪れました。だるかったり、なにもかもが面倒だったり……本当に、特に連休明けにぐっと来るものですね。私は能天気な方だと思っていたので、びっくりしました。そんな時、皆さんなら何をして気晴らしをしますか？

ショッピングやお出かけもいいのですが、私は音楽を聴いたり映画を見たりしてごろごろして過ごすのも好きです。私が好きなのはSMAPの「オリジナル・スマイル」という曲で、昔オロナミンCのCMにも使われていたと思いますが、何も考えずに聴いて元気が出ます。何も考えずに、というところも私のポイントで、何かにくよくよ悩んでいるときに深い意味のある歌詞の歌を聴くのもいいのですが、逆に気分が落ち込んだり、更に考え込んだりしてしまう事もあります。何も考えずに（このエッセイのタイトルは「考える」なのですが）見られて、かつ音楽もよく、話もすばらしいという三拍子揃った映画はそう多くはありません。面白くても、恋愛ものを見て余計落ち込んだり、意味深いドラマだったりすると、気晴らしのしたいときには向いていません。それでは、一体どんな映画がいいのでしょうか？

私が元気が出ないときに「ちょっとアレでも見るかな」と思う映画のひとつに、『フォーエバー・フィーバー』があります。名前からしてすごいですね、フィーバー。表現が古いです。それもそのはず、これは70年代の大ヒット映画、『サタデーナイト・フィーバー』とその時代をネタにした映画なのです。

舞台は1977年のシンガポールです。青年ホックは、ブルース・リーと大型バイクにあこがれ、自転車ですーぱーに仕事に行く平凡な毎日を過ごしていました。家では英語をはなせないおばあちゃん、お父さん、お母さんに出来のいい弟と比べられ、味方である妹はハーレクイン・ロマンスの虜で毎日違う小説の主人公の名前で呼ぶよう強要してくる。そんなある日、幼馴染のメイら仲間とはやりの「フィーバー映画」を見に行きます。「あんなのは女の見るもの、男はカンフー！」といていたはずのホックは映画の虜、更にダンス大会で優勝すれば憧れのバイクが買える賞金がもらえると知り、メイと組んで一緒にダンス教室に通うことにします。何度も「フィーバー映画」を観に行き、スクリーンから出てきた”トニー”（ジョン・トラヴォルタ風）にダンスの極意を教えられつつ大会を目指すのですが、同じ教室に通う美人ダンサー、ジュリーが自分のパートナーと仲違いしたため、ホックをパートナーに誘います。ホックはジュリーに淡い恋心を抱いていたため、それを知ったメイと仲が悪くなってしまいます。その頃、ホックの弟が重大な決断をし、家族にも大事件が……。そんななかダンス大会が始まります……。

ストーリーは「どこかで見たような…」感じで、俳優陣も全くなかよくありません。ですが、

この映画はとにかく明るく、音楽が場面に調和しており、更には性的なシーンやややこしい話が一切ありません。とにかく、ふらりと思いついて見て、ホックの何でも直球勝負なところに微笑み、「フィーバー映画」に苦笑い、ジュリーのパートナーの高飛車ぶりに怒ったり、ダンスシーンではちょっと自分も踊ってみたりしているうちになんとなく幸せな気がして、映画も終わる、といったところでしょうか。もう何度も見ましたが、飽きることなくまた見てしまいます。他にも私の好きな明るい映画はたくさんありますが、音楽のこと、気負わずに見られること、ちょっと感動することなどをあわせて考えると、この映画が私にとっては「元気の出る映画ナンバーワン」なのかもしれません。

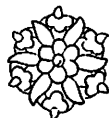
更に、「フィーバー映画」が、明らかに『サタデーナイト・フィーバー』なのに、出てくるのは偽トラヴォルタが踊りまくるシーンのみでとても微妙であるとか、音楽はオリジナルではなく全部シンガポール人によるカバーであるとか、細かいつつこみを入れたくなるようなシーン、カット、エピソードがちりばめられ、みればみるほどに奥の深い映画です。おばあちゃんだけがマレー語（中国語？）を話したり、オカマが冷やかしの対象にされたりといった設定も、シンガポールの現実を捉えていて面白いなあと思いました。

アメリカ版『Shall We ダンス?』も公開され、ダンスに心惹かれる人も多いかと思います。そういった方も、なんだか元気がでないという方も、いち早く夏バテという方も、更には体調はなんともない方でも、是非この映画を見てみてください。その前に、本家の「フィーバー映画」である『サタデーナイト・フィーバー』を見ておくとよりいっそう楽しめますが、こちらは気の重いエピソードも混じるため、元気の出ないときにはあまりおすすめしません。

-----  
『フォーエバー・フィーバー』 1998年 シンガポール 91分

監督：グレン・ゴーイ

出演：エイドリアン・パン（ホック）／マデリン・タン（メイ）／アナベル・フランシス（ジュリー）ほか





## 真理を求める人の第五の階梯「敬虔さ(ワラウ)」

アブー・サキーナ

### ☆「ワラウ」の意味

イブヌ・ファーリスの『語源測定辞典』によれば、「ワラウ (Wara')」の語源である「Wa/Ra/a」は「カッフ(Kaff)」と「インキバード(Inqibaadh)」を意味するとのことである。「カッフ」とは、とめること、控えること、慎むこと、思いとどまることを意味し、「インキバード」とは、抑制、制限、萎縮、ひるむこと、しりごみすることを意味する。つまり「ワラウ」とは、「アッラーへの畏れの気持ちから、自分には関係のないものや必要のないものから身を引くこと」をいうといえよう。『現代アラビア語小辞典』(池田・竹田編)には、「敬虔さ」と訳されているが、日本語での適訳は何だろうか。

### ☆クルアーンとスンナにおける「ワラウ」

「ワラウ」とは、「タクワー(畏れ)」をさらに高め、深めたものだという。それゆえ、「ワラウ」という言葉そのものはクルアーンの中で言及されていないが、「タクワー」についての御言葉をそのまま「ワラウ」に関するものと受けとめてもいいだろう。

至高のアッラーは、畏れる者、つまり「敬虔な者」を次のように形容されている。

『それこそは、疑いの余地のない啓典である。その中には、主を畏れる者たちへの導きがある。主を畏れる者たちとは、目に見えないものを信じ、礼拝の務めを守り、またわれが授けたものを施す者、そしてわれが汝(ムハンマド)に啓示したものの、また汝以前に啓示したものを信じ、来世を堅く信じる者たちである。』(2:2)

『正しく仕えるということは、汝らの顔を東や西に向けることではない。正しく仕えるとは、アッラーと最後の日、天使たち、諸啓典と預言者たちを信じ、かれ(アッラー)を愛するがゆえに自らの財

産を、近親や孤児、貧者や旅路にある者、物乞いや奴隷の解放のために費やし、礼拝の務めを守り、定め喜捨をなし、約束したときにはその約束を果たし、また困難と逆境、非常時に際しては、よく耐え忍ぶ者。こういった者たちこそ誠実な者たちであり、またこういった者たちこそ主を畏れる者たちである。』(2:177)

続いては、我らが指導者ムハンマドさま(祝福と平安あれ)のお言葉を。

クシャイリー師は、教友アブー・ザッルさま(アッラーのご満悦あれ)にまで遡る自らの伝承経路によって、次のハディースを伝えている。

アッラーの御使いさまは(祝福と平安あれ)言われた。

『よきムスリムたることのひとつに、関わりのないことを放っておくということがあります。』

(ティルミズィーやイブヌ・マージャ出典の伝承経路真正のハディース)

それから預言者さまが教友アブー・フライラさまに言われた言葉に、次のようなものがある。

『ワリウになりなさい。そうすれば人々の中でも最もよく(アッラーに)仕える者となるでしょう。』

(バイハキーとイブヌ・マージャ出典)

☆「ハディース(よきムスリムたることのひとつに…)」の解説

「クシャイリーの書簡」では、先のハディースの解説として、クシャイリー師とイブラーヒーム・ブン・アドハム師の言葉が引用されている。

クシャイリー師曰く、「ワラウとは、つまり疑わしきものを捨て置くことである。」

イブラーヒーム・ブン・アドハム師曰く、「ワラウとは、疑わしきものをすべて捨て置くことであり、自分とは関わりのないもの、つまり必要以上のものを捨て置くことである。」

#### ☆「ワラウ」の種類

ヤフヤー・ブン・ムアーズ師は言う。

「ワラウには二通りある。表面的なワラウ、つまり至高のアッラーのため以外には動かないこと。そして内面的なワラウ、つまり至高のアッラー以外のものを心の中に入れぬことである。」

#### ☆「ワラウ」に関する、先達の言葉

ー教友アブー・バクルさま（アッラーのご満悦あれ）曰く、「私たちはかつて 70 ものハラールを放棄していたものです。一つのハラームに陥ってしまうことを恐れて。」

ー教友アブー・フライラさま（アッラーのご満悦あれ）曰く、「将来至高のアッラーのおそばにいられるようになる者（ジュラサーウ＝ッラー）とは、敬虔（ワラウ）と禁欲（ズフド）の民です。」

ーアブー・スライマーン・アッ＝ダーラーニー師曰く、「ワラウとは、禁欲（ズフド）の最初である。あたかも納得が満足の先端であるかのように。」

ーヤフヤー・ブン・ムアーズ師曰く、「ワラウとは、自分で解釈することなしに知っているところまで立ち止まることである。」

ーユース・ブン・アビード師曰く、「ワラウとは、疑わしきものすべてから出て、毎秒自己反省を繰り返すことである。」

ースフヤーン・アッ＝サウリー師曰く、「ワラウよ

り容易きものはお目にかかったことがない。心の中でうごめくものがあつたら、それを捨て置くだけである。」

ーマアルーフ・アル＝カルヒー師曰く、「批判しまいとするように、称讃することからも舌を守りなさい。」

ービシュル・ブン・アル＝ハーリス師曰く、「一番難しい行いは三つある。貧しいときに寛大であること。ハルワのときに（アッラーとだけ過ごすときに、あるいは修行の一環として自らの師とのみ過ごすときに）敬虔であること。そして恐れられ、頼みごとをされる者の前で真実を語ることである。」

ーバスラのアフマド・ブン・ムハンマド・ブン・サーリム師曰く、「サハル・ブン・アブディッラー師が『純粹に許されたもの（ハラール・サーフィー）』について尋ねられた。すると彼は次のように答えた。「それはその中において至高のアッラーが背かれないものである。『純粹に許されたもの』とは、その中において至高のアッラーが忘れられることのないものである。」

ーアル＝ハサン・アル＝バスリー師がマッカに行かれたときのこと。教友アリーさま（アッラーのご満悦あれ）の子供たちの一人が、カアバ神殿にもたれつつ人々に教えを説いているのを目にした。アル＝ハサン師は喜び勇んで彼のもとに駆け寄り、次のように尋ねた。

「ディーン（宗教）の基本は何でしょうか。」

「ワラウ（敬虔さ）です。」

「では、ディーンの病は？」

「食欲さです。」

アル＝ハサン師は彼に感服し、後ほど次のように言った。

「けし粒ほどの健全なワラウ（見栄や傲慢とは無縁の誠実なワラウ）は、千の重石ほどのサウム（断

食齋戒) やサラ(礼拝) よりも素晴らしい。」

—サハル・ブン・アブディッラー師曰く、「ワラウを伴わない者は、象の頭を食べても満足しないであろう。」

—伝承として伝わるところでは、至高のアッラーは預言者ムーサーさま(祝福と平安あれ)にこう啓示されたという。

『われに近い者たちがわれに近づくのに、ワラウ(敬虔さ)とズフド(禁欲)ほどのものはない。(つまり、ワラウとズフドが最も人をアッラーへと近づけてくれるということ)』

—第5代正統カリフと称されるほどに正義の治世を築いたウマル・ブン・アブディール=アズィーズについて伝わるところによると、あるとき彼のもとに戦利品の中からミスク(じゃ香)が運ばれてきたという。ところが彼はそれを前に自分の鼻をつまんで言った。

「その香りは人のためになるもの。ムスリム大衆をよそに私はその香りを楽しみたくはない。」

—かつてハッサン・ブン・スィナーン師は、横になって寝ることも、肉を食べることもなく、60年の間冷たい水を飲むことはなかったという。その人が死後ある人の夢枕に現れた。

「アッラーはあなたにどうしてくださいましたか？」

「よくもてなしてくださっています。ただ一度借りたまま返さないでいた一本の針がゆえに、ジャンナ(天国)には入れてもらえぬまま押し留められてはいますが…。」

#### ☆反省と自戒

スバーナッラー、導入部で引用した『よきムスリムたることのひとつに、関わりのないことを

放っておくということがあります。』という預言者さまのお言葉は、含蓄に満ち満ちている。シャーフイー学派中興の祖、イマーム・アン=ナワウィが厳選した「40のハディース」で取り上げられているのも、なるほど頷ける話である。

この短くも教訓に満ちたハディースからは、多くのことが学べるだろうが、中でも私たちの誰もにとって大切な一点を強調して述べておきたい。

それは一言で言うと、「優先順位を定め、それに従うこと」である。

イスラーム学というのは、この世の栄達を計るためのものではなく、審判の日にそれを学ぶ者およびそれに感化される者を救ってくれるものである。ただ知識を得るだけならば、勉強すれば身につく容易いものだ。しかしながら問題はその知識をいかに生かすかであり、そのための忠告を、三つに要約してお教えしよう。

①アッラーを思い出すこと(ズィクル=ツラー)に従事すること。

②礼儀を身につけること。(アッラーに対して、預言者さまに対して、ムスリム同胞やムスハフ《クルアーンのコピー》などアッラーやその御教えイスラームに関するモノに対して…etc.)

③自分に関わりのないものに足を突っ込まないこと。

『よきムスリムたることのひとつに、関わりのないことを放っておくということがあります。』というハディースや、「自分のことをしなさい。」というイマーム・マーリクが伝える預言者さまのお言葉があるように、今の自分にとって一番大切なことに従事し、将来必要となるものなど、今現在必要ではないものに足を突っ込んではいならない。諸君の時間は非常に貴重なものであり、目の前にある情報すべてを覚えようとするのではなく、将



来的にはなく自分が今学ぶべきものを選択してその修得に従事すべきだ。学問には段階がある。まずは覚えるべきものを覚えるといった基礎作りが大切であって、「フィクフ（行為規範学）」ならば自分が学び従う学派の基礎がまとめられたマトゥン（詩文）を暗記することから始めるべきであって、各見解の根拠を探し求めるべきではない。そういったものは将来やがて学ぶべきときが来る。優先順位を前後してはならない。学問は段階を経て一段ずつ積み重ねてゆくものだ。初心者が一度に全部を修めようとしたってそれは無理な話であり、結局何も修められずに終わってしまうだろう。肝心なのは、何が今優先されるべきかを見極め、その優先順位に従って行動することである。」

繰り返すが、イスラーム学は実学である。それを語る以上、自分がそれを実践しないわけには、少なくともそれを試みないわけにはいかない。関心を捨てるわけではなく、その関心を実践に移すに足るアッラーのしもべとなるために、しばらくの間手を休めるだけである。願わくはアッラーのお赦しを、そして今まで辛抱強くお付き合いくださった読者の皆さんのお赦しを祈りたい。深謝。

#### 《参考文献》

復刻版「クシャイリーの書簡」P.236-243、アブドゥルハリーム・マハムード博士+マハムード・ブン・アッ=シャリーフ博士/文献確証・注解 2002年ダール・アル=ファルフル版



## レシピーコーナー

### バウンドケーキ

材料：

バター 100g

砂糖 80g

卵 2個

薄力粉 100g

ベーキングパウダー 小さじ 2/3      牛乳 大さじ 2

作りかた：

- 1-ボールにバターを入れクリーム状にする
- 2-砂糖を加えて白っぽくなるまで混ぜる
- 3-別の容器に卵を割り入れ、卵白からしっかりと混ぜ、最後に卵黄を加えて混ぜる
- 4-薄力粉とベーキングパウダーを加える
- 5-最後に少し温かくした牛乳を混ぜる
- 6-170度 40分焼く



あるところに、きれいな農場や庭のある、美しい国がありました。

その国を流れる川は、透き通っていて、冷たく、人々を楽しませてくれました。果物や、野菜も、いろんな種類のものが実り、人々は豊かに暮らしていました。

その国には、立派な王様がいました。正義を守り、優しい王様でした。人々が何をほしがっているか、いつも気にかけていて、またいろんな危ないことから、人々を守ってくれました。

ある日、王様は、二人の家来それぞれに、農場を預けました。その広い農場には、動物や、いろんなものの材料になるものなどがそろっていました。家来たちは、農場を王様に返すまでに、農場をうまく使って、大きな収穫を得ようと考えました。

でも、家来たちの喜びは、長くは続きませんでした。なぜなら、このすばらしい農場を狙っている悪者がいたからです。農場はどんどん荒らされていきました。

王様は、この家来たちに、使者を送りました。使者は、王様のお言葉を二人に伝えました。やさしい言葉で書かれた王様のメッセージは、次のようなものでした。

「あなたたちに預けた農場を、私がお金を出して買いたい。そうすれば、私はその農場を、悪者から守ることができる。農場の収穫はあなた方のものだが、私は、私からの命令ということで、その農場の仕事をさせよう。だからその農場はもっと大切にされる。あなたたちも、悪者を相手に苦しむ必要がなくなる。農場のためにいるものは、私が準備するが、収穫はあなた方のものになる。」

家来は、使者に尋ねました。「もし、売らないとしたら、どうなるでしょう。」

家来は、王様のメッセージを続けて読み上げました。「ごらんのように、悪者がたくさんいて、みんな、いろんなものを取られてしまっている。もし、私に売らなかったなら、農場も取られてしまうだろう。私が払うはずだったお金も、あなたたちは受け取れないし、私が預けたものを守らなかったということで罰も受けるだろう。」

王様のお言葉を聴いたあと、家来のうちの一人は、次のように言いました。「喜んでお売りします。私を苦しみから助けてくださって、王様に本当に感謝いたします。」

もう一人の家来は、うぬぼれやで、わがままでした。農場が自分のものであるかのように思い込み、それがずっとなくならずにあるとっていました。ほかの人たちに起こった、困ったこと、苦しいことが、自分にも起こるかもしれないとは考えなかったのです。

「王様が何だというんだ。私は売らないぞ。」 と、その家来は言いました。

それから何ヶ月かがたちました。王様の言いつけに従った家来は、悪者の手から農場が守られ、王様と中のよい人になることも、できました。そして大金持ちになっていきました。

もう一人の家来は、うぬぼれのせいでひどい目にあっていました。悪者たちは、誰も守っていなかった農場を、簡単に奪ってしまいました。いろいろなものを奪っていき、残ったものにも、火をつけて燃やして

いってしまったのです。ブドウ畑も、庭園も、いろいろな機会も、動物たちも、残らずなくなっていました。

家来は全てをなくしてしまったのです。その上、王様から預かった農場を守らなかったのも、ばつをうけ、ろうやにいれられてしまいました。

人々は、その家来をかわいそうだと思いましたが、同時に、「自分が悪かったのだ。」とも考えました。家来はとても不幸で、独りぼっちになってしまいました。でも、それは全て仕方のないことだと思っていました。ろうやをだされると、すぐ、王様のところに行き、謝ったのです。

「後から悔やんでも、仕方がないのだよ。」と、王様は言いました。

「あなたがよく考えて、行動しなかったことで、あなたは大変な目にあってしまった。大金持ちになれるチャンスがあったのに、何もかも失ってしまった。決して、同じ失敗を繰り返してはいけないよ。」

家来は言いました。 「また、同じチャンスがめぐってくるでしょうか、王様。」

王様は言いました。 「あなたは、本当のチャンスのことをまだ知らない。限りのない財産を、あなたは手に入れることもできるのだよ。」

「私のような人に、誰がそのようなものをくれるでしょうか、王様。」

「神様だ。」と王様は力強く応えました。

「知恵、魂、心、目、耳、言葉、そしてあなたが持っている全てのものを、本当の持ち主の神様に差し上げたら、天国で、限りのない財産と、幸せを手に入れることができるのだ。」

家来は尋ねました。

「神様のものを、神様に差し上げるとは、どういうことでしょうか。」

「使者が運んできたメッセージ、つまりクルアーンに耳を傾け、そこでいわれていることを聴いて、守ることだよ。」

王様は教えてくれました。

「それができれば、この世界でも幸せになれる。命令は簡単なことだから、だめといわれていることをわざわざやることもない。」

家来は言いました。 「あなたが預けられたものを、私は守ることができませんでした、王様。とても悲しいです。でも、王様が言われたことを、私は守ります。神様から預けられたものを、私は守ります。」

そして、家来は王様の宮殿から帰るため、王様からお許しを求めました。王様は、家来を見送りながら、

「きちんと約束を守るよう、願っているよ、そうでなければ、あなたは、何かを手に入れようとしているのに、それを失うことになってしまうからね。」と言ったのです。



パラダイスにおけるみ使いの同僚達

ラビアは言った。

私は夜はいつもみ使いの側に待するのである。彼のタハッジドの礼拝に備えて沐浴の水や歯ブラシ、礼拝用の敷物などを私が準備した。ある時彼は（私の奉仕に対して、大変喜んで）私に言った。

「何が一番欲しいか」

私は答えた、おお、アッラーのみ使いよ！私はパラダイスにあなたのお供がしたいのです。彼はまた聞いた。まだ他に欲しいものがあるか。私はそれを否定し、これが私の長い間の念願の唯一のものであります。と言ったところ彼はいった。

「よろしい、不断に叩頭して私を助けなさい」

ここに私どもの学ぶべきものがある。われわれは定められた礼拝だけでなく、われわれの祈ることを達成するためには、別に実際上の努力（特別のナフルの礼拝）をなすべきである。まことにこの世は因果の世界である。努力の最大のものは礼拝である。この種の特別の礼拝は、聖者や一部の敬虔な人々によってのみ行われるべきものと誤解されている。もちろんアッラーは時には彼の至知と全能から、われわれにははつきりせぬような原因に対し、ある結果を与えたもうことがある。しかしこれは特殊のまれな場合にのみ限られる。

しかしわれわれは、この世において決して礼拝のみに頼らず、また運命のみに安住してはならない。あらゆる可能な努力をすることは緊張である。そして来世における所得のために、宗教上または倫理上の定めに加えて、われわれの最善を尽くすべきで、礼拝のみがそれを定める唯一の要素であると考えべきではない。また宿命論者のように、すべてを無慈悲な運命のみに帰すべきでもない。もちろん敬虔にアッラーを敬愛する人々の礼拝は、それに相当する結果が得られる。しかし彼らは、当然なすべき敬虔な努力をしたというだけのことである。み使いでさえラビアに対し「しばしば叩頭して私を助けよ」と言っている。けだし暇な時には、礼拝せよとの意である。

購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三井住友銀行 店番号：005（春日部） 口座番号：7315959 口座名義： Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> [info@yasuragiweb.com](mailto:info@yasuragiweb.com) [yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部